

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	再発大腸癌術後サーベイランス戦略の国際発信と共同研究体制構築
氏名 Name	藤田 覇留久
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	医学研究科医学専攻 消化管外科学 博士課程 4年
渡航国 Country	ドイツ (ベルリン)
渡航日程 Travel schedule	2025年10月15日 ~ 2025年10月21日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

2025年10月17日から21日にベルリンで開催された European Society for Medical Oncology (ESMO) Congress 2025 に参加し、本邦での多機関共同研究である再発大腸癌切除後のサーベイランス戦略に関する私の研究成果を発表した。また、滞在中にはシャリテ・ベルリン医科大学および附属病院を訪問し、同大学で研究に従事されている日本人医師の Dr. Ikeda と意見交換を行った。

成果 Outcome

ESMO は欧州最大規模の臨床腫瘍学会であり、世界各国から研究者や臨床医が集まる。メイン会場はさながらライブ会場のようで、大規模な国際研究が次々と紹介され、臨床腫瘍学の潮流を直に感じる事ができた (写真 1,2)。私は「Clinical Features and Outcomes of Second Recurrence After Resection of Metachronous Recurrent Lesions in Colorectal Cancer」という演題を e ポスターセッションで発表した (写真 3)。本邦および欧米のガイドラインにおいても、再発大腸癌に対する手術後のサーベイランス戦略には明確な推奨がない。本研究は本邦の多機関共同研究であり、再発大腸癌に対する R0 再発巣切除後のサーベイランス最適化を目的に、原発巣ステージの情報を二次サーベイランス設計に取り込む有用性を検証し、本邦のガイドラインへの反映を目指すものである。主な結果は以下のとおりである。

- 再発巣切除後の再再発は2年以内に9割以上が発生しており、5年を超えての再再発は認められなかった。
- 原発巣ステージが高いほど再再発リスクは段階的に上昇した。

以上を踏まえ、術後2年間の集中的なフォローアップと、フォローアップ全体の期間は少なくとも5年を推奨し、さらに原発巣ステージに基づく層別サーベイランスの有用性を提案した。自身の研究を国際的な視点から見直す上で、大変貴重な経験であった。

学会全体を通じて特に印象に残ったのは、欧州における臨床研究の規模の大きさである。本邦では数十施設が参加する共同研究が大規模とされる一方で、欧州では数十か国が協力する試験が多く、症例数、研究基盤、倫理審査の仕組みなど、研究を支える体制そのものが大きく異なる。日本主導で国際共同研究を進める際に直面する言語や倫理審査の壁を思うと、制度的な環境の差は想像以上に大きく、今後の研究の進め方を考える上で強い示唆を受けた。

滞在中にはシャリテ・ベルリン医科大学および附属病院を訪問し（写真 4）、同大学で研究に従事されている日本人医師の Dr. Ikeda と意見交換を行った。京都大学消化管外科から欧州へ研究留学する例はこれまでほとんどなく、その実現性や具体的な課題について直接お話しする貴重な機会となった。

近年の円安や物価高騰により、研究者にとって渡航費・宿泊費・参加費はいずれも大きな負担となっている。今回の ESMO での発表や現地での交流も、本助成のご支援がなければ実現は難しかったと考えており、このたび採択いただいたことに深く感謝申し上げる。

今後の展望 Prospects for the future

再発大腸癌という限られた領域の研究を発展させていく上では、症例数の蓄積や多様性の確保が不可欠であり、そのためには国際的なデータ共有が大きな意味を持つ。今回の渡航を通じ、国際共同研究の体制を整える必要性をこれまで以上に強く認識した。今後は、欧州側の研究者と連携しながら、国際レジストリの構築に向けた準備を進めるとともに、本邦のデータ基盤をどのように国際標準へ接続していくかについて検討を深めていく予定である。

今回得られた知見や経験を日常診療と研究活動に還元し、今後も大腸癌の集学的治療における新たなエビデンス創出に貢献できるよう取り組みを続けたい。

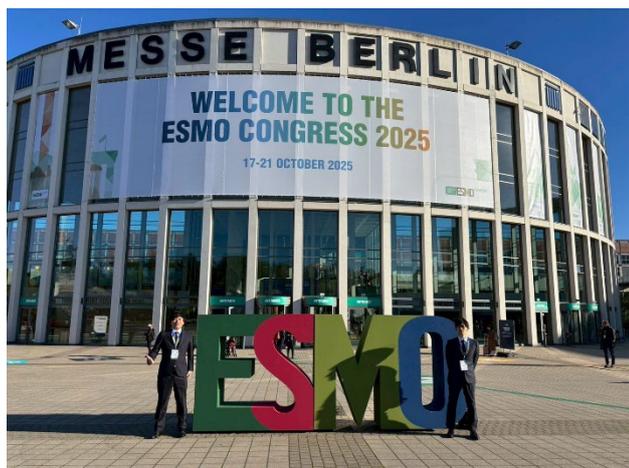


写真 1. 学会会場



写真 2. メイン会場

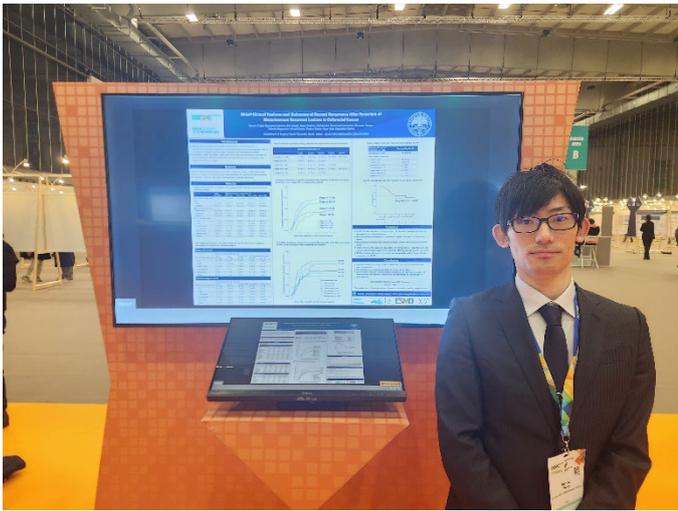


写真 3. ポスター発表の様子



写真 4. シャリテ・ベルリン医科大学付属病院